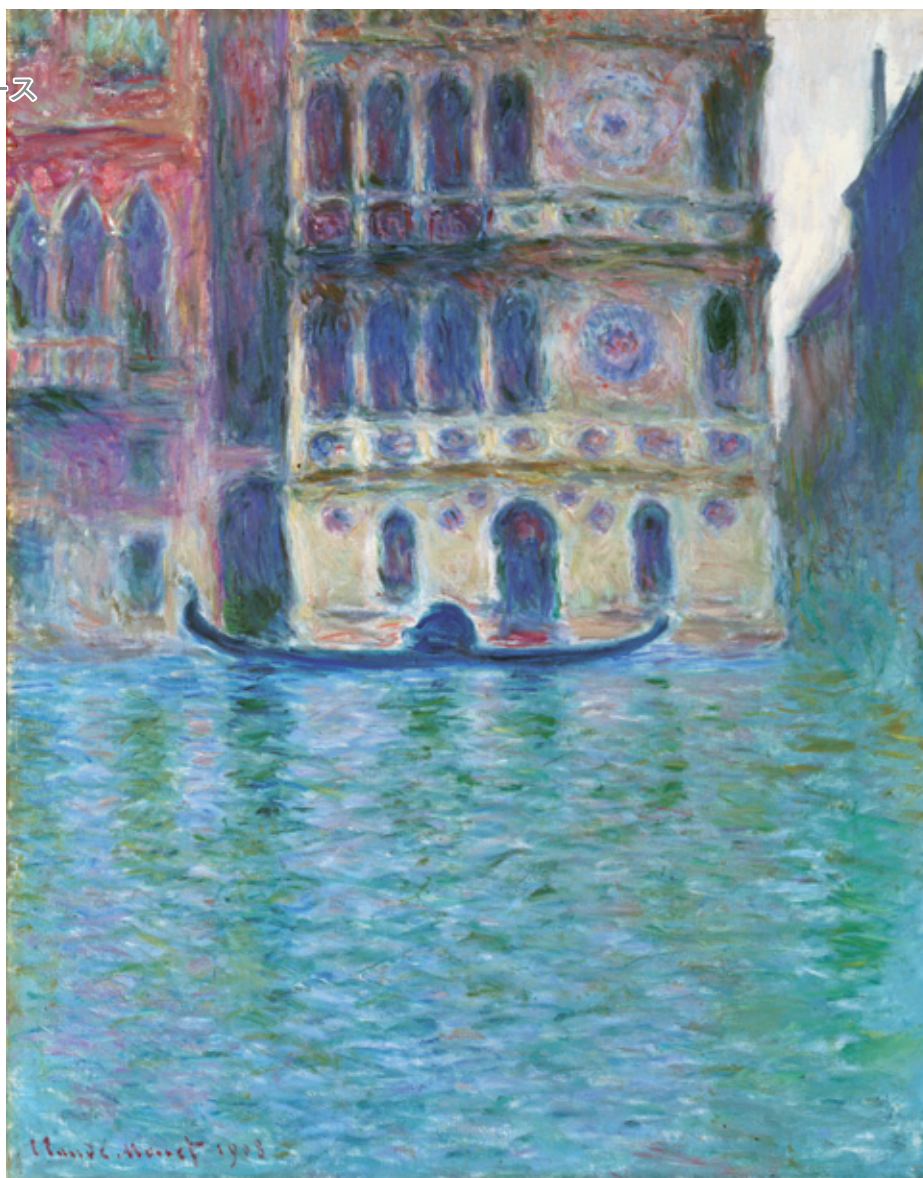


AR CA DIA

72
AUTUMN 2017

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



眼の極楽② 花と鳥のかたち

館長 榊原悟

牡丹の蕪村

牡丹と云えば、七寸ばかりにもなろうかと云う大輪であることに加え、ゆるやかにうねる葩(花弁)のいく重にも重なり合う、その豊かな花容こそが最大の魅力であろう。それらは花弁の数や重なり具合によって一重、八重、万重に分けられ、さらに咲き方から抱咲、盛上咲、獅子咲などと呼ばれるものがあつた。また花色も白に紅、朱、緋、臙脂や紫(黒に近いものからさまざまの段階の紫があつた)、黄などと実に多い。薬も大きく、輝くばかりの黄色が濃紫や紅の葩にひととき映える。豊麗、華麗の語は、まさしく牡丹の花のためにある、とさえ称しても過言でない。しかも強くはないが、香りもある。牡丹人気の際にも得心がいくと云うものだが、実際、桜も散り、世のすべてに陽気の満つる頃になると、須賀川(福島県)だの長谷寺(奈良県)だのとこの花のことが話題にのぼる。全国その土地々々に牡丹の名所があるのだから。牡丹は、もはやわたしたちの花暦にすっかりその位置を占めるに至つた。

そうした牡丹を詠んだ歌一首を掲げておく。三十一文字と牡丹はどうにも相性が悪いらしく、この花を取上げた歌に名歌はないと云うのが定評らしいが、この一首だけは別格。近代の歌人木下利玄(一八八六―一九二五)の絶唱である。

牡丹花は咲き定まりて静かなり 花の占めたる位置のたしかさ

もう半世紀も昔、教科書で知つた。以来、わたしにとつて牡丹と云えば、この歌である。確かに豊麗なる牡丹の花が一輪在るだけで、その場の空気は一変する。端然としたたすまい、自ずからその位置を占めたかの如く咲く牡丹の、圧倒的存在感を余すところなく表現した。

蕪村にもこんな句があつた(以下掲出の句は、特に記さない限り、すべて蕪村の吟)。

広庭のぼたんや天の一方に

方百里雨雲よせぬぼたむ哉

ESSAY

虹を吐いてひらかんとする牡丹哉

庭に在る牡丹に対比させるのに天と雨雲、それに虹まで持ち出す。実に氣宇壮大だが、それも牡丹の存在感あればこそだろうし、またそうであればこそ、

ちりて後おもかげにたつぼたん哉

牡丹切つて気のおとろひし夕べかな

散つた後の喪失感も大きい。気もおとろへるのだから。

寂として客の絶間のぼたん哉

牡丹は牡丹としてかく在る、と云うのだ。先の利玄の歌と並べれば興趣は尽きない。しかし、そうした存在感も、すべては牡丹の吐く生氣と陽気による。

波翻舌本吐紅蓮

閻王の口や牡丹を吐かんとす

不動画く琢磨が庭のぼたんかな

蟻王宮朱門を開く牡丹哉

ついでに酒井抱一の一旬も添えておこう。

飛ぶ蝶を喰んとしたる牡丹かな

牡丹に舞い遊ぶ蝶、のどかな情景だが、その蝶さえも喰んとする―むろんこのイメージには、あの謡曲「石橋」の、寂照法師が文殊浄土へ通じる石橋を渡ろうとする場面の獅子と牡丹があつたはずで、その牡丹を獅子と重ね、漲るばかりの旺盛な生氣を表現したのだが、抱一がさらに蕪村の閻王の牡丹を知らぬはずがない。その句が抱一のさらなる連想を刺激した。蕪村の五七五、言葉の魔術である。

氣になるのは、これらの句が詠んだ牡丹の花容だ。「閻王」以下の句の花色は、むろん紅蓮の炎の紅に決っている。それ以前の句は白色だろう。しかしいずれも万重の獅子咲きか。いや、一重で、黄金に輝く薬が露なのもいいかも知れない。すでに元禄年間(一六八八―一七〇四)牡丹栽培の一大ブームが起こり、新た

な品種の育成が進んだと云うではないか(麓次郎著『四季の花事典』八坂書房一九九九年)。こんな品種の作出もあつたはずだ。さらに貝原益軒(一六三〇〜一七二四)の『花譜』にも、

牡丹をみるに巳のときをよしとす、巳より後ハひらけすを。花の精神を
とろへちからなく、うるハしからず、午時より後にみるは牡丹をしらざるなり
とある。牡丹鑑賞に適した頃合までが話題に上る。牡丹を詠んだ蕪村の眼の背
景に、そうした牡丹栽培の盛行あつたことは間違いない。

いや、それだけではない。蕪村(一七二六〜一八三〇)の時代の享保十六年(一七三二)、かの沈南蘋(一六八二〜?)が来日。その伝えた写実的絵画は、南蘋唯一の日本人弟子熊斐(神代彦之進 一七二二〜七二)やその又弟子の宋紫石(楠本雪溪 一七二五〜八六)を通じ、以後の画壇に決定的影響を与えた。蕪村も例外ではない。しかもその南蘋はまた「牡丹図」を得意としたらしく、この後、南蘋様の
豊麗な「牡丹図」が描き継がれていく(榊原悟「殿さまのお絵描き」『大鎖国展』
図録 岡崎市美術館 二〇一六年)。残念ながら蕪村のそうした「牡丹図」
は、未だ見出されていないようだが、彼が南蘋の「牡丹図」を承知し注目してい
たことは間違いない。こんな句を遺しているからだ。

南蘋を牡丹の客や福西寺

牡丹が咲いたので沈南蘋を客に招くが、その場所は福西寺に限ると云うのだ。
句意はそれだけである。だがこの句が興味尽きないのは、唐もの尽くしと云う
点だ。福西寺は言うまでもなく福濟寺のこと。長崎を代表する黄檗宗寺院だ。
崇福寺、聖福寺などと共に唐寺と呼ばれた。その唐寺福西寺に唐人南蘋を招
く。むろん蕪村は牡丹にも唐めきたるものを見ていたはずだ。と云うより、そ
もそも蕪村の句作に唐めき趣味が横溢することは既に定評あるところ。前掲
した牡丹の諸句の、例えば「天の一方に」の句にもそれが窺えるだろうし、さら
に次の一句、

白梅や墨芳しき鴻臚館

を挙げるだけで充分だろう。そう云えば蕪村が

しら梅に明るる夜ばかりとなりけり

ESSAY

と辞世して亡くなった折、その死の報らせを受けて友人上田秋成(一七三四〜
八〇九)は、

かな書の詩人西せり東風吹て

と詠んで甲意を表したと云うではないか。辞世吟を踏まえた秋成の即妙の吟
には、全くもって言葉もないが、秋成は、その蕪村を「かな書の詩人」と評した。
やまと言葉を用いて漢詩同然の境地に至った俳人(詩人)と云うのだろう。当
然言外には、わが国屈指の漢詩人でもある天神さまこと菅原道真(八四五〜
九〇三)にも匹敵すると云うのである。蕪村の牡丹吟の多さと完成度の高さは、
彼の唐めき趣味の発露と云うべきだろう。その「かな書の詩人」蕪村のすべ
ての牡丹吟を代表する一句こそが、

金屏のかくやとして牡丹かな

である。何ともおらかな味わいがいい。「読ストンと腑におちた」。

問題は、ここに云う金屏がどんなものなのかと云う点と、そのことも関係
あるが、牡丹が何処で咲き誇っているかと云う点とである。そのことも含め、そ
もそもこの句を詠んだとき蕪村は、牡丹を眼にしていたのか否か。だがこれは
愚問だろう。「菜の花や月は東に」のあの句を詠んだとき、蕪村の眼前に菜の花
畑が広がっている必要は全くないからだ。言うまでもなくかつてそうした視覚
体験さえあるならば、蕪村の構想力でこの句を詠むことは充分可能であるに
違いない。その伝でいけば、眼前に牡丹がある必要はないのだが。しかしそこま
で断じることもないのかも知れない。

つまり話はこのところだろうか。蕪村がこの句で表現したかったのは、あ
くまで艶やかに咲く牡丹の、その豊麗さであつて、そのために最も効果あるも
のとして赫奕と輝く「金屏」を思い出し、対比させたと云うのである。となれ
ば、その「金屏」がどんなものか、美術史家の端くれの一人としても、改めて問題
とすべきだろう。それに「金屏」の内容次第では一句の意味も自ずから違うもの
になるかも知れないからだ。

しかしこの点について従来の蕪村句の註釈は、「金屏」が「金屏風」だと述べる
だけで、甚だ素ツ氣ない。ならば問題にしたいのは、その「金屏風」だ。だがそれ

について考える前に、あらかじめ述べて置かねばならないのは、その「金屏風」が、今日わたしたちがこの語で思い浮かべるはずの、それではないと云うことだ。要するに披露宴で新郎新婦の後背に立て廻す、あの金箔を貼付しただけの「金屏風」ではないと云う点である。どうもこの点に従来の註釈は誤解があったように思えてならないのだが。しかし蕪村の時代そんな「金屏風」はあるはずもない。蕪村は他にも「金屏」を、

金屏うすものの羅は誰があきのかぜ

と詠んでいるが、これも同然だろうし、ましてや、

みじか夜や枕に近き銀屏風

と詠んだ「銀屏風」に至っては、これが枕屏風であるならば中屏風あつたはずで、そうした「銀屏風」が、銀箔を貼っただけである可能性など、露ほどもない。当然それらの「金屏・銀屏」には絵が描かれていたはずだ。その絵は、銀屏のいぶし銀ならずとも銀箔のやゝ沈んだ輝きには、水墨による「山水図」こそが相応しい。現に蕪村のそうした銀屏風の超大作が遺る（天明二年・二七八二 M I H O ・ M U S E U M 蔵）。

では、「金屏」には何が相応しいかと云えばもうお分かりだろう。そう「花鳥図」である。金箔のキラリとした強い輝きには、その輝きに負けない派手な色彩を本来備えたモチーフこそが選ばれる、と述べたではないか。その「金屏」に牡丹が描かれていたら、先の「金屏・牡丹」の一句は、その描かれた牡丹を詠んだ可能性すら出てくるのだが、そう断じることよりも、ここでは蕪村の「金屏」のイメージの根底に、そうした「花鳥図」の「金屏風」があったことと、その「金屏風」がおそらくは狩野派によって制作されたものであることを確認しておきたい。それと云うのも、蕪村が目にする可能性がある「花鳥図」には、もう一つ俵屋宗達や尾形光琳（二六五八〜一七一六）ら琳派のそれがあつたはずだが、既に狩野博幸氏も指摘するように、琳派と牡丹とは相性が悪かつたようで（狩野博幸「やまと」ところと牡丹の花『琳派』2 花鳥二しこうしや 一九九〇年）、伊年印を捺す「四季草花図屏風」など例外的作品を除いて、そもそも琳派の牡丹を取上げたものはごく少ないからである。豊麗な牡丹ならば宗達あたりが描いて

ESSAY

いてよさそうだが、全くないと云うのも不思議だが、ともあれ蕪村が目にすることができた「金屏風」の「牡丹図」は、どうやら狩野派のそれしかないだろう。重要な点はその狩野派の「牡丹図」に鋭敏に反応したのは蕪村の「唐めき好き」のころだと云う点である。その意味で琳派の絵師で本格的に牡丹を描いたのが、あの「蝶を喰んとした」牡丹を詠んだ抱一だと云うのは、実に興味深い。抱一もまた「唐めき」のころを持っていたのだろう。

となると蕪村の眼とところを捉えた狩野派の「牡丹図金屏風」はどんな作であろうか。



図 牡丹（白鶴美術館本「四季花鳥図屏風」より）

特別企画展

ウェールズ国立美術館所蔵

ターナーからモネへ 【下】

高見翔子

前号では、「ターナーからモネへ」展全体について、みどころを紹介しました。今回は展覧会出品作品の中から、三点の風景画作品とともに、ターナーからモネまでの風景表現の変遷を簡単に紹介します。

十九世紀初頭に興ったロマン主義運動は、自由な創造性や精神性などを美の規範として目指した運動でした。イギリスでは、特に風景画にその成果が見られ、ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー（一七



図1 ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー《難破後の朝》1840年頃

EXHIBITION

七五―一八五二)やジョン・コンスタブル(一七七六―一八三七)が代表として挙げられます。

ターナーは、世界の破滅的、終末的な状況を描くことに主な関心をもち、嵐、風雨、雪崩、吹雪、波浪、噴火などの自然の暴威を表わす場面と、圧倒的な自然の力に翻弄される人間を強調的に描き出しました。彼は、国内外を問わずよく旅行をし、イギリス国内に留まらず、イタリアの古都、アルプスの渓谷、西インド諸島の火山など、きわめて幅広い画題を採り上げました。《難破後の朝》(図1)は、彼が子供の頃からよく訪れた、イングランド南部のケントにあるマーゲイトの海岸沿いの町で描いたスケッチに基づいて制作した作品とされています。この作品では、ターナー作品において最大の魅力である「光」の描き方も特徴です。薄いベールを透かして輝くような光、あるいは大気全体が発光体であるかのような美しい光は、北国イギリスの淡い光を捉えています。

十九世紀中頃から後半にかけてのフランスでは、古典主義的な絵画

様式が主流となっていました。イタリア・ルネサンスに始まり、フランスでは十七世紀に確立したこの絵画様式は、政府主催の公募展「サロン」で高い評価を受け、公的な注目を専有するなど、当時のフランス社会で承認を得ていました。

フランスのパリとオンフルールを拠点に風景画を描いたウジェーヌ・ブーダン(一八二四―一八九八)は、一八五九年にリアリズム(写実主義)の画家であるクールベと詩人のボードレールに作品を認められます。彼は、この年から亡くなる前年まで



図2 ウジェーヌ・ブーダン《ボルドー》1875年

会期：平成29年9月23日(土・祝)～11月12日(日)

定期的にサロンに出品しており、初めて出品した一八五九年には、サロン評においてボードレールに取り上げられました。また彼は、一八五八年に当時少年であったモネにオンフルールで出会い、自然観察と戸外での絵画制作の意義を教えました。《ボルドー》(図2)は、一八七四年末から七五年の頭にかけての六週間、ボルドーへの滞在中に制作された作品です。彼は、素早い技法でマストと艤装を正確かつ詳細に描いています。その作風から「空の王者」と呼ばれるブーダンは、自然から大気の色彩をつかみ光の微妙さを表現する力に長けていました。この作品からも、変わりやすい空や海の色に対して鋭敏な感受性をもっていたことがよくわかります。

一八七四年、パリで後に「第一回印象派展」として知られるグループ展が開催され、彼らは、形態の明確な描写よりも、移ろいゆく光や大気の印象を再現しようと試みました。一八八三年以降、フランスで興った印象派はイギリスへ拡がります。印象派を代表するクロード・モネ(一八四〇―一九二六)は、しばしば

EXHIBITION

「光の画家」と呼ばれるように、戸外の光に対する鋭い感覚を示した画家でした。自然に対する彼の繊細な感覚を絵画に結びつけたのは、少年時代に出会ったブーダンでした。この出会いは、後の彼にとって重要なものとなりました。また普仏戦争の際、ロンドンへ逃れたモネは、カミーユ・ピサロ(一八三〇―一九〇三)とともにターナーやコンスタブルらの作品に接し、とりわけターナーの作品に感銘を受けたとされています。このことから、印象派の特徴のひとつである「筆触分割」による明るい画面の表現が誕生したといわれています。《サン・ジオルジョ・マツジョーレ、黄昏》(図3)は、彼がヴェネツィア滞在中に、島のほとんどが修道院になっているサン・ジオルジョ・マツジョーレ島を描いた連作のうち的一点です。燃え上がるような色彩と筆致によって、サン・ジオルジョ・マツジョーレ島のシルエットが映し出されています。また光を反射する水面は、筆触単位による表現を通して揺れ動く様子が描き出されています。この作品においても、対象自体がもつ色

(固有色)にとらわれず、鮮やかな色彩が用いられており、印象派の特徴が窺えます。

二号にわたって「ターナーからモネへ」展についてご紹介してきました。本展では、英国・ウェールズ国立美術館のコレクションから、十九世紀から二十世紀初頭に制作された七十三点の作品を展覧します。巨匠モネの色彩表現をはじめとし、西洋美術における風景画などの変遷と魅力をご堪能ください。



図3 クロード・モネ《サン・ジオルジョ・マツジョーレ、黄昏》1908年

会期：平成29年9月23日(土・祝)～11月12日(日)

掲載作品は、すべて ウェールズ国立美術館©National Museum of Wales 所蔵

火、それは暮らしに欠かすことのできないものである一方、人命や生活の基盤全てを奪う危険なものです。十分な消防設備のない時代では、火災への恐れは今よりずっと強いものだったことでしょう。火伏（防火）の靈験あらたかな秋葉山（浜松市）は、そうした人びとの心の拠り所として、江戸時代から現代にいたるまで広く信仰を集めています。

本展では、三河地域における秋葉信仰のあり方を示す資料約一〇〇点を展示します。特に注目すべきは、寺外初公開となる二軀の秋葉大権現像と秋葉山本宮秋葉神社の刀剣です。

秋葉大権現は信仰の対象として、その木像が蒲郡市などを中心に三河の寺院でも祀られています。岡崎の甲山寺・総持院の秋葉大権現像はその中でも群を抜いた大きさです。甲山寺の像は十一月十六日の法要の日だけ御開帳され、総高は約一九七センチと圧巻です。また総持院の像「後期展示」は、最後の開扉が判明しない秘仏で、本展を機に御開帳いただく運びとなりました。こちらでも甲山寺の権現像に劣らぬ

大きな像です。

秋葉山本宮秋葉神社の刀剣は、重文「太刀 銘 弘次」をはじめ四口を展示します。同社には多数の刀剣が奉納され、現在重文三口をはじめ四十九口が伝わっています。しかし火伏の神であるはずの秋葉山でなぜ刀？と思われた方は是非展覧会へ…。他にも浮世絵、古文書、絵図などから江戸時代の盛んな信仰を紹介し、今に伝わる民俗事例を通してその変容と展開を追っていきます。

地域の暮らしや風景にごく自然に溶け込んでいるこの秋葉信仰。本展では三河の人々の心に息づく秋葉信仰とその歴史を紐解いていきます。

会期：平成29年11月25日(土)～平成30年1月14日(日)



秋葉大権現像(甲山寺)

COLUMN & TOPIC

地域史を考える視点 三

堀江登志実

博物館などの資料収集は学芸員の資料に対する熱意があつてこそ実現するものである。収蔵品の充実が学芸員の思いに支えられている。

私が学芸員活動のなかで系統的に収集してきた資料に岡崎城絵図がある。現在まで十五枚以上が岡崎市の収蔵品となっている。これらは寄附と購入によるものである。正村氏寄附の後本多時代の岡崎城絵図や二木謙一氏寄附の岡崎城下町絵図は、現在進められている岡崎城跡整備のうえでも参考資料として利用され、町づくりにも活用されている。

岡崎城絵図は、家康時代のものではなく、多くが江戸時代の城と城下町を描いた図である。絵図は城主の在任時代により前本多氏時代、水野氏時代、松平氏時代、後本多氏時代に分けられるが、一番数が多いのが前本多時代、次いで水野時代。後本多時代がわりと少ない。江戸前期の図が多いことは城の修築などの改変があつたことによるものであろう。

これらの集められた城絵図にはよく似た絵図が多くある。似ているからといって集めるのをためらうのでなく、あえて似た絵図でも意識的

に集めてきたからである。似ていても詳細にみると相違点が少しはあるものである。この相違点が城郭や城下町の推移を考える上で重要な情報をもたらしてくれる。量的に数が増えれば、それらの絵図を比較検討することにより編年的に城の変遷がわかるのである。

こうした比較による資料的意味付けはなにも絵図にかぎることではない。博物館がより多くの資料を集めることは、比較により固有の資料価値を見出すためにも必要なことである。収蔵スペースが限定される博物館では類似資料の収集には否定的であるが、地域の特徴も多くの類似資料の比較を試みるなかからみえてくることを考えれば、地域史を考えるうえでも収集の姿勢は重要な点となろう。



岡崎城絵図

INFORMATION

■平成29年度特別企画展

ウェールズ国立美術館所蔵

ターナーからモネへ

9月23日(土・祝)～11月12日(日)

□須川展也スペシャルコンサート(当館1階セミナールームにて)

日時:11月3日(金・祝)午後2時～

出演:須川展也氏(サクソフォン)

□美術講座(当館1階セミナールームにて)

「19世紀絵画と科学」

日時:11月5日(日)午後2時～

講師:高見翔子(当館学芸員)

□展示説明会(当館1階展示室にて)

日時:11月11日(土)午後2時～

■平成29年度企画展

三河の秋葉信仰—火伏の神の系譜

11月25日(土)～1月14日(日)

□講演会(当館1階セミナールームにて)

日時:12月9日(土)午後2時～

講師:堀江登志実(当館副館長)

□歴史講座(当館1階セミナールームにて)

「いざ秋葉山へ!—参詣にみる三河の秋葉信仰」

日時:1月13日(土)午後2時～

講師:湯谷翔悟(当館学芸員)

□展示説明会

日時:12月2日(土)、12月23日(土)、1月7日(日)

いずれも午後2時～

子供と魚釣り

先日、4歳になったばかりの息子と、近所の乙川へ釣りに行った。私も幼い時に父親に連れられて川に釣りに行ったが、その時は真冬で、釣りをする前に足を滑らして川に落ち、泣きながら家に帰った。悲しい記憶を思い出す。

狙いはハヤという5センチぐらいの小さな魚。コイ科の淡水魚のうち、中型で細長い体型をもつものの総称で、ハエ、ハヨとも呼ばれている。食べられないことはないが、この辺ではいわゆる「外道」で基本食べる習慣のある人はほとんどいない魚である。

竿はのべ竿で、仕掛けは7号の針に丸浮きを付け、エサは近所の釣具屋さんでサシ(ハエの幼虫)を購入。お店の冷蔵庫に入っている時はピクリとも動かないが、すこし温かくなるととニョロニョロと動きだし、子供は面白がつて興味津々。針にエサを付けて竿を垂らすと、直ぐあたりがあり一匹釣ることができた。その後も移動をしながら順調に釣れて、結局1時間ぐらいい間に7匹釣ることができた。今回は魚を釣ることができ、父親の威厳が保たれてよかった。釣った魚は家で飼うことになり、もともといる金魚と一緒に、狭い水槽の中で元気に泳ぎ回っている。(坂)

おしゃべり、あれこれ。

風流天子 徽宗^{きこう}

北宋末期を舞台に宋江ら一〇八人の豪傑の活躍を描いた『水滸伝』。その中で私は徽宗が好きである。そこで今回は徽宗について簡単に紹介する。

彼は第六代皇帝神宗の十二子で即位に際し家来に反対されるも皇太后の意向により即位する。迫りくる外敵遼や金への対応、民衆の反乱など内憂外患に苦慮し、最後は侵攻してきた北方の金に捕虜・拉致され北の寒地で死去する。

ところで皆さんは徽宗についてどのようなイメージをお持ちでしょうか。恐らく風流天子として絵画(『桃鳩図』が有名)や書(『瘦金体』という書体を考案)など芸術に没頭する一方、政治には関心がなく宰相蔡京ら一部の者に任せきりの無責任な皇帝。政治を顧みず国を滅ぼした亡国の皇帝と認識されているのではないだろうか。

しかし近年そうした徽宗像が見直されている。彼は「親政」体制を模索して宰相蔡京と相剋しつつ、その手段の一つとして「御筆手詔」(皇帝直筆の命令文書)を執行機関に直接下すなど政治は家来に任せきりにせず積極的に関与していたようである。政治家徽宗としての一面である。彼は決して芸術にうつつを抜かしていた暗愚な皇帝ではなかった。徽宗の虚構がようやく剥がれつつある。(柴)

編集後記 | 今年も気付けば残り2ヶ月を切りました。年末には岡崎市美術館で年に一度の企画展が行われます(12月6日から24日まで。)。今年は収蔵品の中から、北川民次の版画作品をご紹介します。メキシコの文化に魅了された異色の画家の作品を是非ご覧ください。(今年は展覧会担当者が美博の学芸員なのでここでこっそり宣伝させていただきました…。無料ですのでお気軽にご来館ください!)(菊地)

表紙図版:クロード・モネ《パルッツォ・ダリオ》1908年 ウェールズ国立美術館



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術博物館ニュース/アルカディア] 第72号 2017年10月発行

編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術博物館

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA